

# 亜細亞的循環市場

上野アメヤ横丁再生計画

## 馬場智史

制作主旨

消費活動は20世紀に大量生産、大量消費、大量廃棄、そして環境問題と負のメカニズムを生み出した。人と人の関係ではなく、ものとの対価によってこの世界全てを決定するシステムである。生産とは切断された関係で爆走する消費、ゴミ処理という隠蔽された巨大な機構、そしてそこから発生する環境問題。

消費活動の原点は物々交換にある。アナタが持っているものとワタシが持っているものに相互に価値を見いだしたときにはじめて消費という行為が発生していた。このような観点から考えると現代社会の消費活動を大きく見直す必要がある。

戦後の東京にはいくつもの闇市と呼ばれる市場があり、消費活動の一つの姿があった。しかし今となっては、防災上の問題などで多くが再開され姿を消した。敷地に選定したアメヤ横丁も戦後の闇市に起源をもつ商店街で、今もなお当時の雰囲気と賑わいを見せている。そのアメヤ横丁も構造物の老朽化や防災上の問題で10年以内にリニューアルを図ろうとする動きがある。

消費活動の原風景的なアメヤ横丁の未来像の提案として、民間商店街の小売り店舗と公的なリサイクルセンターのコンプレックスを循環市場と名付けて提案する。

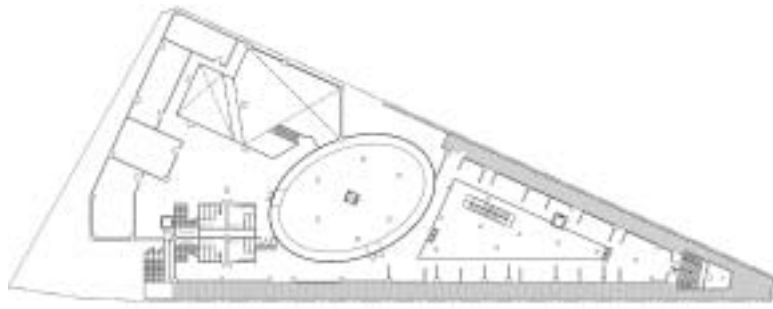
講師評：若色峰郎・渡辺富雄

卒業制作では作者が日常生活の中でどんな問題意識を持ち、それをどう組み立て、プロジェクトとして提案してくるか大変興味深い。近年、ゴミ問題や環境問題をテーマとする作品が多くなっているが、この作品もその部類に入る。

馬場君の案は、戦後の闇市に起源をもつアメヤ横丁を消費活動の原風景ととらえ、それにリサイクルマーケットを重ね合わせるというアイデアである。物々交換が消費の原点であるとし、生産 消費 廃棄から生産 消費 再生へと換え、その循環を可視化させるべきだという考えは十分理解できる。

建物中央に4層吹き抜けのシンリンダーを囲みリサイクルマーケットを配し、外周に小売り店舗を並べ、立体的に構成したフレームを通路にして、建物全体をショーウィンドーのようにしようという構成である。

物販系の建築の場合、特に物の流れ、人の流れが重要になるが、その辺をもう少し詰めてくれるともっと良くなったと思う。また、公営のリサイクルマーケットと説明されているが、誰が作り、誰が運営するのか、その母体や組織はどうなるのだろうか。この辺についてももう少し言及してくれるともっと現実味を帯びてくると思うのだが.....。



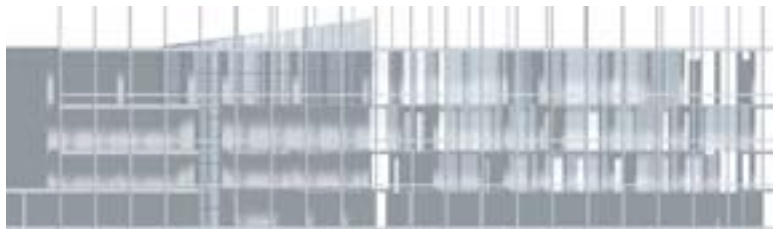
3階平面



断面



断面



立面



配置

